

多様な対話と振り返りを通したキャリア教育の実践

—主として、中等教育において—

Practice of Career Education through Various Interactions and Reflections

—Mainly in Secondary Education—

赤 萩 千恵子

(Chieko, AKAOGI)

1 本実践研究の目的と内容

日本の子どもは自己肯定感が低いと言われて久しい。穏やかに生活しているように見えて、自己を肯定的にとらえていないため、どこかに不安や焦燥を抱えている。それは、自分の考えを率直に伝えることに臆病だったり、他者からどう見られているかを気にして深く関わることを避けたりする傾向となって表れていると考えられる。子どもたちには、自分の考えをもち、多様な他者との出会いを通して、社会とつながり、豊かな人生を作り上げてほしい。

ところで、中央教育審議会答申（註1）では、では、キャリア教育について、「子供たちが将来、社会の中で自分の役割を果たし、自分らしい生き方を実現するための力を身に付けるべく日々の教育活動を展開することこそがキャリア教育」であるというように、生き方教育の一環としてのとらえ方もされている。また、「キャリア教育が目指すもの」の目的の一つに、「学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させ、学ぶ意欲を向上させる」（註3）ことを挙げている。

中学校におけるキャリア教育の目標は、「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」「興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成」「進路計画の立案と暫定的選択」「生き方や進路に関する現実的探索」（註3）である。その中から、本実践研究では、「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」に焦点を当てる。また、小学校の目標「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」を受け、高等学校の目標「自己理解の深化と自己受容」（註3）につながる指導としていきたい。

時代の変化が激しい今日、社会や職業の在り方も急速に変化する。新たな時代を力強く生き抜くための資質・能力の育成が急務である。その力を、「自ら考え続ける力」「より良い生き方を求め続ける力」と考え、本研究実践に取り組んだ。

2 本研究実践の目的

本研究主題「多様な対話」とは、他者・自己・情報（図書等）等との対話を指す。そこには、他者との対話から新しいことに気付いたり、自分の考えを深めたり、広げたりして確かなものになながら、自己内対話を通して振り返り、経験を絶えず再構成していく学びが展開される。また図書や

新聞等の情報を通しての知識の吸収と再構築が行われる。多様性にかかれていた経験は、価値や感性を問い合い、自分とは違う感じ方を体験することで、互いの考えや情緒を揺さぶり合うことができる。そうして、自分が主体として存在し、自分の過去を価値付け、肯定する、つまり、自己価値の承認を実感する体験を繰り返すことで、自己の存在を受容し、自己理解を深める中で、自尊感情や自己肯定感を高めることができると考えた。

本校では、生涯にわたって、よりよい生き方を求められるよう、「ほんものの私になる」という「目指す生徒像」を掲げる。「ほんものの私」とは、「多様な考え方や価値観に耳を傾け共に学び、生涯において学びを切り拓く人」「言葉を生きる力として実生活に生かし、よりよい生き方を創り上げる人」「多様ななかかわりの中で、豊かな感性を育み、他者と共によりよく生きようとする人」と定義している。これは、総合的な学習の時間の目標のうち、特に、「生きる力」の育成と合致する。よりよい生き方としての「ほんものの私」を探究するために、「個」のみでなく、異年齢を含めたグループ・集団による学びを効果的に組み合わせる。さらに、地域や識者などの「多様な教育人材の協働」によって、より豊かな学びを創り出すことができると考えた。具体的な単元や学習過程では、言語活動を軸として、横断的に教科等の関連を図る。

以上のことより、本研究の目的は、多様な対話や振り返りを取り入れる実践を通して、「自分自身と向き合い、自分の考えを形成することで、自己理解と自己肯定感を高めること」「よりよい人生を切り開こうと考えることが、学ぶ意欲の向上につながる」を目指して、学校全体で取り組むものである。

3 本研究実践の内容と方法

(1) 全校生徒で取り組むにあたって、「よりよく生きるとはどういうことか」について、一人一人の生徒が、継続して考え、指針や志向性を示す共通の言葉が必要であると考えた。キャリア（生き方）教育としてそれぞれの教育活動を関連付け、集約するための軸となる言葉である。そこで、目指す生徒像として、「ほんものの私になる」を掲げた。将来にわたって考え続ける指針となり、生徒の成長に合わせて言葉自身も変容していくに足るもの、つまり、生徒が考えることで深まり、共に育つ言葉であることを第一に考え、「ほんものの私になる」に決定した。

(2) 教育活動をキャリア（生き方）教育の視点でつなぐことを大前提とした。具体的には、目指す生徒像の具現化のために、各教科で指導内容を検討したり、指導法を工夫したりする。また横断的に、総合的な学習の時間・特別活動・道徳と各教科を関連させた指導を考えた。ここでは、全校生徒で、総合的な学習の時間・特別活動・道徳と国語科を関連させて取り組んだ「全校読後交流会」について記す。この単元は、言語活動（書くことと語り合うこと）を軸に、多様な対話を重ねて、自らの考えを構築する過程を重視する。

(3) よりよい生き方を自ら求めるために、多様な人と出遇わせ、今までの自分の考えを大いに揺さぶられ、新しい考え方を獲得する体験をさせたいと考えた。そのためには、学校に関わる資源

（専門家・地域・保護者・生徒同士・教職員等）を総動員して、学校を中心に全方向につながることを意識した。具体的な教育活動は、全校意見発表会・全校読後交流会・「地域の大人とディスカッション」と称する小グループでの生徒とゲストティーチャーとの語り合い、講演会には、専門家（作家・天文学者・ジャーナリスト等）を招聘した。また、2年生では、「立春式・大人になるとは」、3年生では「『ほんものの私になる』について語る会」等の講演会と討論会、卒業時には在校生に向けて「私の提言」を発表する機会を作った。

3年間を通じた多様な人々との対話を通し、自分や他者の存在や価値を受け止めるとともに、豊かな言葉による新しい視点を獲得できる環境を整えた。また、興味・関心が自己から他者、そして社会認識へと広がるように留意した。

（4）学習のたびに、感想・報告をワークシートや作文の形態で文章化し、ポートフォリオとして生徒一人一人が蓄積した。また言語化することで、メタ認知の力を育て、自分自身の経験を客体化し、定着させることができると考えた。キャリア教育の視点からも、作文やワークシートを蓄積することで、生徒がいつでも自分の思考や学びを振り返り、気付きをもつことができる。それは、すなわち、自己内対話を繰り返すことで、自分の思考過程や自らの変容を見届け、価値付けることができると考えたからである。

4 実践研究の実際

4.1 読後交流会（総合的な学習の時間・特別活動・国語科を関連させた言語活動）

4.1.1 単元名（総合的な学習の時間・主たる関連教科は国語科）

「よりよく生きるために考え、創造する」—『走れメロス』全校読後交流

4.1.2 単元の目標（全学年共通）

よりよい生き方としての「ほんものの私」を探究するために、課題図書の読書を通じ、学び方を身に付け、課題を見だし、根拠を明確に自分の考えを形成して表現するとともに、それを多様な他者との対話や交流を通じて再構築することができる。

4.1.3 学習過程

読後交流会とは、同じ作品を読み、それについての感想発表、論点を挙げて意見交換を全校で行

学習過程	主な位置付け	主な活動内容
①課題把握	・朝読書（教育課程外）	課題図書を個人で読み、疑問点や感想を書く。
②考えの形成	・総合的な学習の時間 ・特別活動（学級活動）	全校読後交流会で話し合う課題（論点や柱）を設定し、自分の感想や考えを書く。
③対話・交流	・クラス読後交流会 ・全校読後交流会 （総合的な学習の時間）	ここでいう「対話」とは、自分自身や図書、他者（級友・全校生徒・大人）等の交流全般、講師である専門家の全校読後交流会の講評を指す。
④考えの再構築	・総合的な学習の時間 ・特別活動（学級活動）	読後交流会終、気付いたこと、考えが深まったこと等を個人で書き、考えを確かなものにする。

う学習である。「自分の考えを発信し交流する」「全校で共に学び合う」「『かわり』の中で気付く」「全員の生徒がやり遂げる」ことに留意する。

よりよい生き方の基盤となる思考力・表現力の向上に当たっては、生徒が、継続して考え、立場をはっきりさせて、根拠をもって考えを形成するとともに、多様な他者との対話や交流を通じて表現すること、また、対話や交流を通じて様々な考えに触れ、自分のそれを再構築することが必要である。

4.1.4 教科（国語科）等との関連

本単元で取り上げる『走れメロス』は、国語科・第2学年の教科書教材である。したがって第2・3学年は既習の教材であり、第1学年は夏休みの課題として読書感想文を書き、国語科の授業（1時間扱い）で感想文を読み合っている。

教科等で学んだ基礎的・基本的な知識や技能を活用する言語活動の場である読後交流会の話合いの「柱」（論点）の設定については、「生き方」を考える視点を取り入れている。具体的には、（正）解が一つに決まらないで、多様な考えが可能な「柱」であること。③国語科との差異を意識した「柱」であること。文章の解釈に主眼をおくのではなく、生徒が登場人物と自分の生き方や考え方と比較したり、重ね合わせたりしながら、生き方について考えを深められるようにした。これは、キャリア教育の「人間形成能力・社会能力の育成」にも位置付くものである。講演や他者の発表を自分の経験と結び付けながら聞き、考えることに力点を置く。

4.1.5 評価基準（言語能力に関する目標）＜総合的な学習の時間＞

観点	ア 課題の設定と生き方の探究	イ 情報収集と学び方	ウ 自分の考えの形成と表現	エ 協同的な課題解決
単元の評価基準 （全学年共通）	読書や交流を通じて自ら課題を設定したり新たなそれを見いだしたりしながら、よりよい生き方を探究している。	課題に応じて必要な情報を収集し、活用するための多様な <u>学び方を身に付けている。</u>	課題に応じ、作品に表れるものの見方や考え方を捉え、 <u>根拠を明確に自分の考えを形成し、表現している。</u>	多様な立場を承認した上で交流し、 <u>自分の考えを再構築している。</u>

4.1.6 実践研究の成果—生徒の感想から—

1年生は、3年生の発言から、自分の目指す姿をもち、3年生は、下級生から、自分の成長を実感した。また同級生や下級生の発表を受けて、自分の気付かなかった考えをとり入れながら、考えを再構築していった。生徒は、「全校で同じ本を読み、一か所に集まって意見交換をして、わくわくした」「人の意見は、自分の意見を見直すための材料になる。」「3年生は、『理由』についても詳しく発言していてすごい」「1・2年生は、話をちゃんと聞いていて、発言している。まだまだだ」と思うところもあるが、上級生の意見に対しても臆せず、きちんと意見が言えて楽しんだ」「当たり前のことかもしれないけど、今回の読後交流会を通して、自分も他人も大切に生きたいと強く思った」というように、全校で取り組む意義を見出している。また、達成感をもった感想も多い。

「3年間で、僕は驚くほど語彙力や書く力が身についたと思う。1年生のときと比べれば読みやすく、きちんと結論のある文が書けた」「1・2・3年の意見が違うのがはっきり出ていたのを聞いて、自分が成長したと実感した。3年間での積み重ねで、大人になったという自信をもった」「自分の中で、何回も同じテーマで考え続けることは大事だ。今の自分に出せる答えを真剣に考え続けていきたい」「様々な人の意見を聞くことで、自分の意見を深められ、そして大切にしようという気持ちが高まった」など、他者との交流を通して、新しい考えに気付いたり、自分の考えが確かなものになったりして、共に学ぶ楽しさを体感している。前者の意見に触れながら、次の発表者が発言することで、自分の意見が認識された喜びと自己有用感を味わう場面も多かった。また「本を読み返すといつも発見がある。だから、『走れメロス』を10年後に読むと、どんな感想をもつのが今から楽しみだ」などの感想もあった。

4.2 多様な対話の機会の設定＜3年間の学習のポートフォリオ＞

4.2.1 【3年間の多様な対話・ポートフォリオに蓄えた学習一覧】

3年間の学習を通して、ポートフォリオ（ワークシートや作文の形態で文章化したもの）として、生徒が蓄積したものは以下の通りである。

1年次	⑭「大人になるとは」考えを書く（冬休み）
①「より良く生きるために考える」全校意見発表会	⑮上記文章をクラスで読み合い、意見交流
②全校読後交流会『くまとやまねこ』と作者講演会	⑯立春式 講演会・討論会
③地域の大人とディスカッション（新聞記者になって職業人にインタビューする）	⑰作文「未来の私へ」を書き、クラスで読み合う。
④「言葉を考える」講演会と意見交流	3年次
⑤職場訪問（半日）	⑱学校運営協議会委員と「わが中学校」についての討論会
⑥全校読後交流会『坊ちゃん』と児童文学者講演会	⑲地域の大人とディスカッション（卒業生と進路について語り合う）
⑦ジャーナリスト「メディアリテラシー」講演会	⑳「より良く生きるために考える」全校意見発表会・意見交流会
2年次	㉑全校読後交流会『星の王子さま』と講演会
⑧「より良く生きるために考える」全校意見発表会・意見交流会	㉒道徳「よりよく生きる－私の考え－」学校運営協議会委員3人の講演
⑨職場体験学習（5日間）	㉓「『ほんものの私になる』について語り合う会」に向けて自分の考えを書く・クラス討論会
⑩地域の大人とディスカッション（職場体験学習の報告会）	㉔「『ほんものの私になる』について地域の大人や保護者とディスカッション
⑪全校読後交流会『種をまく人』と翻訳者講演会	㉕全校『ほんものの私になる』について語り合う会」討論会と講演会

⑫天文学者「宇宙につながるいのち」講演会	⑳全校読後交流会『走れメロス』と講演会
⑬全校読後交流会『鼻』と講演会	㉑「私の提言」を1.2年生に向け書く・発表会

4.2.2 生徒の変容の分析－3年間のポートフォリオ・面接より－

生徒は、自分の蓄積したポートフォリオを見返し、自分の成長を振り返る。ポートフォリオによって、自分の学習の経緯を視覚的にたどることができ、過去の自分の文章や作品に愛着を感じ、懐かしむと同時に、過去の自分自身を、客観的に振り返る効果がある。

ここでは、ポートフォリオ（作文やワークシート）と個別の面接による生徒の言葉を資料として、生徒の変容を分析する。

4.2.2-1 3年間のポートフォリオ（作文やワークシート）を振り返りつつ、自己内対話を繰り返し、自分の考えを確立していく過程（例1）

（1）＜要約と考察＞

「自分の判断では、自己満足になりかねないから、他者の評価が必要だと考え続けてきたが、『自分の考えから出発していいのだ』という考えに変容した経緯が分かる。客観的に見ることばかりにとらわれ、自分の気持ちや判断を置き去りにしていた自分に気付いた。自己評価の低さから、自信がもてずにいたが、自己肯定感をもてるようになった経緯が綴られている。『肯定的自己理解』を手に入れることによって、人からの評価が気になり始める少年期・青年期前期から、抜け出した様子も手に取るようにわかる。

（2）＜男子生徒Yのポートフォリオと面談より－肯定的自己理解・自我の萌芽－＞

下記表の番号は、上掲【ポートフォリオに蓄えた学習一覧】の番号と呼応

⑭⑮＜大人になるとは＞の皆の文章を読んだ感想＞2年1月

「自分に認められるように頑張る」という意見があったが、僕はこの意見に反対だ。人間は、やはり自分を甘やかしてしまう。だからこそ、自分は頑張っていると認め、安心したいだけなのだ。自分の評価とは、自分だけで決めることはできない。他人に評価され、周りに頼られる人材になることが大切なのではないだろうか。

⑯＜「立春式」井坂 聡氏講演会・意見交流会＞ 2年生（2月）

受験1年前で、所属しているサッカーのクラブチームを、休もうかどうしようかと悩んでいた時期だった。その時期に、講演を聴いて、遠くのことより目の前のことを着実にこなしていくのが、今の自分に一番大事なことだと気付くことができた。お話を聴き、何か吹切れたような気がした。うまくいかないことを嘆くよりも、自分のできることから始めることの大切さを実感した。良い時期に講演を聞いたと思った。

⑰＜まとめの作文を書く「未来の「私」へ＞ 2年生（3月）作文

自分で自分を評価することは難しい。なぜなら、主観的な目では、ただの自己満足になる。…しかし他人に評価されること、僕はそれとも違うと思う。だからこそ、自分を客観的に見つめ直す目をもつことが大切だと僕は思う。

㉑4作文＜「ほんものの私になる」とはどういうことか＞2年3月

「ほんものの私になる」というのも自分では決められないものだと考える。自分で自分を評価することは難しい。なぜなら、そこには必ず主観的な目が入ってきてしまうからだ。かと言って、他人に評価されることで、本当に「ほんものの私になる」ということに近づいているのだろうか。僕はそれも

違うと思う。だからこそ、自分で自分を客観的に見つめ直す目をもつことが大切だと僕は思う。

㊤＜「ほんものの私になる」西研氏の講演会と全校討論会＞ 3年生（12月）

客観視する視点を養わなければ、ただの自己満足にもなりかねないと考えていた。しかし、講演から、まずは自己満足でもよいのではないかと、自分に満足する、自信をもつことが初めの一步なのだと考えるようになった。逆に初めから第三者の目を気にしては、自身の意見が委縮するばかりであるとも考えた。

小学校の時からサッカー強豪チームに所属し、「ライバルは練習しているだろうか」「コーチは、僕を選手に選んでくれるだろうか」と、他人ばかりを気にしていた。つまり、自分から出発していなかったのだ。本当の自信がなかったのだ。中学校に入って、「自分って何だろう」と考えるようになった。周りと比較することが多くなり、自分の意見を客観的にみるようにした。主観的だと分からないことが多いと考え、そうならないようにとても注意した。しかし、比較したり、他人の目を気にしたりしないで、＜自分自身がやり切ったと思えるぐらい、練習したり、勉強したりしてから、いろいろ考えればよい＞と思えたら、安心した。

4.2.2-2 中学3年生になり、進路の決定に向けて自分自身と向き合った。＜例2＞

（1）＜要約と考察＞

小学校高学年頃から、大人に反発を感じながらも、実際に反抗することもなく、不満な気持ちで生活していた。一方、「こうあるべきだ」という考え方で自分を縛り、自分と真剣に向き合ってこなかった。自信をもつ場面も少なく自己肯定感も低いので、自分でも気付かないうちに、自分を否定し、常に不安を抱えていた。しかし、切羽詰まった状態（＝受験）になり、いよいよ自分と真正面から向き合わなければならなくなった。そこで、悩み、少しずつ自己理解ができたことで、次の一歩が踏み出せた。自分の考えや思いに素直になり、もっと多くのことを感じたいと思えたことで、自立へ向かった過程が分かる。＞

（2）＜生徒M・Aのポートフォリオと面談より―自分と向き合う・大人からの自立＞

＜生徒M＞ ほんものの私？今の私がほんものだと、考えた。理由は、今の私がほんものでないなら、にせものなのか。しかし、にせものの私なんていない、と思ったからだった。

3年生になってからやってみたいと思うものを見つけた。しかし、それをするには目の前にある壁を乗り越えていくための思考と努力が必要となってしまった。私が到達したい場所へたどり着くには時間がかかる。その時間の使い方が最も重要だ。後で有意義だと思えるようにしなくてはならない。

そこで、最初の「ほんものの私になる」に対する答えを捨ててはならなかった。自分は、にせものとかほんものとか単純なものではなく複雑にできていると気付いた。今の私がほんものだと思うたら、それで満足してしまう。次に進む気力がなくなってしまう。それは自分にとってマイナスに働くかもしれない。高校生になる前に、自分を真正面から見つめ、努力の方法を考える必要がある。

「ほんものの私になる」の答えは分からなくてもよいと思う。単なる自己満足かもしれない。そうだととしても、上手く自分に利用できれば、考える意義が生まれると思う。

＜生徒K＞ 2年の初めに、「『ほんものの私』」などはない。「私は私だから」と書いていた。3年生の卒業時に、「小学校の作文の時間にいつも直されて、自分を否定的に見ていたと気付いた。だから、自分の考えに自信がなかった」と自己分析した。受験勉強をする中で、自分と向き合うことが自然と多くなり、「今の自分より、もっと輝ける自分になりたい」と強く思うようになった。失敗やうしろめたいことは誰にでもある。「あのとき失敗したからこそ、頑張ろう」としていくべきだ。完璧じゃないのが人間、隠したいことがあるのも人間らしさだと思う。何でもうまくいったら面白くない。

講演を聴いて、自分の良いところを伸ばせば良いと気付いた。そして、英語を一生懸命勉強したいという将来への希望がもてた。その前提として、苦手な教科に一生懸命取り組んだことで、逆に、好きな教科を発見できた。自分の短所や非を自分で認めないから、自分を認められなくなる。プレッシャーばかり増えて、失敗したとき、立ち上がれなくなる。立ち上がらなければ、失敗する意味がないのに。

一度、自分の良いところを見付けると、やりたいことがどんどん見付かる。自分ってどういう人間なのだろうと考えることで、「ほんものの私」になり、輝いていける実感が湧く。自分のことをよく理解するのは、私は、作文を書いているときだ。自分の思うままに書いているとき。小学校では、「先生はこんなふうには書けと言っているのかな」と想像して、先生に褒められるように書いていたが、中学校は違った。何を書いても認められた。小学校の頃は、届かないような理想の自分を語ることが求められていたと今、感じる。今までの自分は、その延長線上にいて、そんな自分にいらだっていたのだと思う。

4.2.2-3 自己受容・過去と現在の自分を肯定的に理解する〈例3〉

(1) 〈要約と考察〉

ここでは、「『ほんものの私になる』について語る会」(前掲 ポートフォリオに蓄えた学習一覧 ②④⑤)での発表やワークシート、面接からまとめたものを提示する。

生徒 K は、小学校1年生の途中から6年生まで不登校だったが、中学生になったのを機に登校するようになった。家庭では、読書をしたり、独学で学習をしたりしていたと言う。主に、読書によって、自己内対話を通した深い学びを繰り返し、自分自身の感性や価値を自問自答している中で、彼の中に、価値と言葉がたまってきたことが、登校の契機となったと推測する。自分の過去を価値付け、肯定できたことによって、内側から自分を変えるきっかけとなったのだと考えられる。過去を肯定的に振り返ることで、将来に向かっても肯定的に自分の生き方を創ることができるのである。

(2) 〈生徒 K のポートフォリオと面談より—自己受容・自己肯定感・自己を創る—〉

人と関わることで得られることも大切だが、一人で考えることも大切だと思う。僕は小学校のときに不登校になったことがあり、そのとき一人で部屋にこもって考えたことが今の自分の成長に大きく関わっていると思っている。

僕は、「ほんものの私」は、自分自身だけでなく世界にあると思っている。世界中に自分の材料があるのだ。僕は「ほんものの私」だが、完結しているわけではない。自分の人生を生きていくうえで、僕はおそらくたくさんの経験をする。これらが経験や知識、人との関わり合いなどが「ほんものの私」の材料になると思う。本をたくさん読んでみたり、知らない土地に行ってみたりと、日常ではないことにもヒントがあると思う。僕は旅行をするのが好きだが、方言・産業・伝統・伝承・地形など、日本の土地からも学べることは多いと思う。だから、どんどん見聞を広めて、自分を、より完全なものにするべきだと思う。そうして、自分に納得のいく生き方をしたい。

4.2.2-4 他者とのかわりを通して、他者受容・他者理解が進み、それが自己有用感につながった。

〈例4〉

(1) 〈要約と考察〉

クラス、学年や学校全体で行う、意見交流や討論会を通して、自分の考えを自由に言えて、他者の考えを正確に聞き取ることができる学習空間を作ること心掛けてきた。また、「正解は一つではない」を合言葉にして、根拠をもって自分の考えを組み立てること、聞き手は、意見の筋道が通っていれば、自分の考えと違って認めることを習慣付けてきた。その中で、生徒は、「他者による自己受容」・「自己による他者受容」を体感してきた。「集団」が「個」を育て、「個」の成長が質の高い「集団」を作る過程において、生徒が「社会」を意識していく様子が分かる。〈生徒 F〉は、

他者によって受容されたことをうれしく思い、それが意欲へとつながっている。そして、「他者と関わることで自己評価」が上がっている。それは「自己有用感」をもたらし、「どんな人がどんな自分を引き出してくれるか分からない。逆に、自分が引き出してあげられるかもしれない」という前向きな言葉に表れている。

(2) <生徒U・Fのポートフォリオと面談による【他者受容】【他者理解】【他者との関わりによる自己有用感の獲得】>

<生徒U>私は、1年生の頃は、A=Bの性格だった。意見発表会や読後交流会を重ねていくうちに、考えはみんないろいろだと分かった。だから自分の考えも決めつけなくていいと思った。自分も他の人の考えにも、正解・不正解はない。
・3年間、みんなの文章を読んだり、意見を聴いたりすることで、人それぞれの考え方がある。社会は、その考えがより集まっているそれぞれがそれぞれの思いで行動するから、社会はたくさんの考えでできていることを実感した。

<生徒F>意見発表の代表者となって発表した時、私の意見について、皆が意見を返してくれたことも、深く考えるきっかけとなった。違った意見を聞き、新しい視点を聞くことで、自分の考えが更に太ったと思った。意見を交流することで、一体感が感じられるし、同じ課題について考えている仲間だと思えると元気が湧いてきた。
自分とは考え方が真逆な人、自分とは合いそうもない人、どんな人がどんな自分を引き出してくれるか分からない。逆に、自分が引き出してあげられるかもしれない。お互いに引き出し合えば、これこそが人と関わることの意味になるだろう。

4.2.2-5 自我の確立・自信・自己有用感・将来への意欲・社会へのつながり<例5>

(1) <要約と考察>

中学3年生の後半に書いた作文や面接での発言を記す。現在の自分を肯定し、現在を立ち位置にして、将来の自分を肯定的に描くことができている。また、将来の自分の姿と関連させて、現在の目標を立てることができている。3年間、過ごしてきた中学校生活にプライドをもち、自分の成長や現在の考え方を、振り返り肯定的に価値づけていることが、未来への力となると考えられる。同時に、自分は何を学び、何を身に付けたのかを明確に言うことができている。

そして、青年期らしく「自由とは何か」「勉強は何のためにするのか」という問いを真剣に考えるようになる。この生徒は「人間の本質を見極めたい」と言う。一方、「社会」へと視野が広がり、社会との関連のなかで、自己実現を図ろうとする意欲も感じられる。

(2) <生徒C・T・I・Nのポートフォリオと面談による【自我の確立・自己を創る・論理的思考・自分の考え方への自信や自己有用感の獲得・将来への意欲・社会へのつながり】>

<生徒C>討論会を重ねるごとに「ほんものの私」というものが、どんどん迷路に入り込むように感じられた。だけど、それがとても面白く感じられた。「ほんものの私」というものに答えがないということは、考え方は無限にあるということだ。僕は、その無限にある考え方を多く知って、自分に吸収したいと思う。そして、自分の中の世界をもっと大きくしていきたい。

＜生徒 T＞西研先生のお話を聞いて、勉強や部活で蓄えた自信を人のために役立てられるとよいということが一番印象に残った。僕は今、その自信を蓄えている真っ最中だと思うので、まだそれを人のために役立てることは考えられていなかった。だから、将来、自信を十分蓄えられたそのときには、人のために自分の自信を役立てられればいい。

＜生徒 I＞ 私は、この三年間の中で、常に、「自分」という人間の本質を様々な視点から追究しようと心掛けてきた。それは、思春期であるから、という安易な理由では片付けることのできないものである。

私は、「ほんものの私になる」という答えのない問いについて考えると共に、その本質を見極めようと努力してきた。そして、その行為は、哲学的、あるいは倫理的な視点を私に与えてくれた。具体的に述べるとするならば、哲学的、というのは、「自由とは何か」「勉強は何のためにするのか」などの抽象的な疑問について考えることを指し、題材は、決して堅苦しいものではない。誰もが一生に一度は考えるであろう、しかし、その核心を突くことは、決して容易でない問いなのである。

しかし、「ほんものの私になる」という活動は、私たちに、先に述べたような問いについて考えを深めるきっかけを与えてくれ、私たちの思考を表現する機会を与えてくれた。そして、このような活動を三年間続けてきた私たちは、中学時代、思春期と呼ばれる時期に、それぞれの意見、考えに確信をもつことができるようになった。これは、大きな財産であるとともに、この先の私たちの、いわば、道しるべとなるであろう。

私は、中学校で養うことができた様々な視点を持ち続け、一つ一つの視点の幅、視野を今後の様々な経験を通して、広げていきたいと思う。

＜生徒 N＞僕は、これまで3年間「ほんものの私になる」について考えてきて、自分の考えには自信をもっている。今日のような会を通して、自分と違った意見を聞くことで、考えの幅は広がったと思うが、他の考えを受け入れられるのは、自分の考えに自信があるからだと思う。自分の考えを確立するまでには、他の考えも聞いて考えることが最適だと思う。自分の考えをもつにも、考えの幅を広げるにも、他の人の考えを聞いて、自分なりの解釈をすることが大切だ。僕は、1年のときも上級生の考えで、「なるほど」と思い、自分がいいと思う考えも、ころころ変わっていた。2年の終わりごろから、自分の考えることが同じになってきた。3年生の初めになると自分の考えが確立したという実感があつた。作文を書いても、考えがあるからどんどん書けるようになった。読後交流会や意見発表会で、自分と違う考えを聞いても、自分の視点に落とし込むことができるようになった。書いた後も、文章を客観的に読み返すことができるようになり、一貫した内容となっていた。3年間の積み重ねだと思う。論理的に考え、人の考えを踏まえて、客観視することができるようになった。

僕は、3年間で自分の考えを確立するまでに至ったので、これから先、さらに多くの人の考えを聞いて、自分の考えの幅をもっと広げたい。このように目標ができてそれに向かっていく「向上心」が「ほんものの私になる」ために大切だと思う。三年間で、「ほんものの私になる」について考えてきたことに誇りに思っているし、この経験は、これからの人生にも大きく影響することだと思う。「ほんものの私」は、僕の中で、どんどん変わっていく。新たな知識や経験などから、求めるものは変わっていく。今は高校に入ることが目的。入学が達成できたら、また次の目標ができてそれに向かっていく自分が「ほんものの私」だ。

このことを考え続けた中学校3年間があつたのとないのとは、自分の成長は全く違ったと思う。僕は卒業後もずっと考え続けていく。

5 高等学校での成長 一楽しみ、頑張りながら「ほんものの私」を目指すー

(1) ＜要約と考察＞

高等学校におけるキャリア教育の目標は、「自己理解の深化と自己受容」「選択水準としての職業観・勤労観」「将来設計の立案と社会的推移の準備」「進路の現実吟味と試行参加」(註4)である。本校では、「卒業生の話を聴く会」に、ゲストとして、高校生を招待し、高校生の現在、考えていることを語ってもらう。以下に、高校2年生の話を紹介する。「自分のことを決める自由があるか

からこそ『ほんものの私になる』という言葉が成り立つのだと思う」や「粘り強く何事にも挑戦し続ければ突然、自分の道が見つかる。案外くだらないことがきっかけになったりする」というところも実感がある。そして、「自分もこれからも楽しみ、頑張りながら『ほんものの私』を目指します」と在校生にエールを送る。自分の今とここまでの歩みを肯定的に振り返り、今後、苦しいこともあるだろうが、将来の自分の夢の実現に意欲と確信をもっている。中学校からの学びである「自分とは何か」「よりよい生き方を求める」が、彼の中で継続して生きていて、主体的に将来を見据えている。それは、高等学校のキャリア教育の目標である「自己理解の深化と自己受容」「進路の実実吟味と試行的参加」「将来設計の立案と社会的推移の準備」に力強くつながっている。

（2）卒業生 Y から、在校生へ向けてのお話

こんにちは。僕の名前は結城怜太です。2年前にこの中学校を卒業しました。僕は今、通っている都立高校でドイツ語を学んでいます。小学生の頃からドイツについて興味があり、中学1年、2年生の時に訪れてドイツという国の魅力に気がきました。そしてドイツ語を学ぶ環境が整っている高校で勉強したいと思うようになりました。高校に入学してから約1年半、ドイツ語を目にしない日はありません。ひとつの学年にドイツ語履修者は130人ほどいますが、誰よりも勉強しています。

そのおかげもあり今年の夏はドイツ外務省と文部科学省のプログラムに参加し、一ヶ月間ドイツで様々な事を学ぶことが出来ました。このプログラムはドイツ語を学んでいる全世界の高校生が一ヶ月、グループになって色々な体験をするものです。1年で90カ国から500人の高校生が参加します。今夏は日本を含め16カ国の高校生達が集まりました。日本からの参加者は5人でした。このプログラムは本当に素晴らしいものです。このプログラムを通じて多くの友達が出来ました。特にリトアニアとチェコの子と仲良くなり、今でも毎日ドイツ語でやり取りをしています。

去年、ドイツ語を教わっていた先生に外国語を勉強すると人生は豊かになると言われたことがありました。当時僕にはその実感が全く湧きませんでしたが、この夏にそれを実感することが出来ました。僕はいま英語を含め外国語を5カ国語勉強しています。まだ英語とドイツ語しか旅行で困らない程度のレベルですが、将来は7、8カ国語を話せるようになりたいです。

僕はドイツ語を学び始めたことによって、「ほんものの私」に確実に近付いたと思います。「ほんものの私になる」ということは、自分が好きなこと、やりたいことを追求し続けることで達成できると僕は思います。もっとも、人には欲があるので「ほんものの私」に近づくほど遠ざかるような気もしますが、もちろん自分のやりたいことばかりやっていても前には進めません。ドイツ語を学び始めてから約1年半、様々な話題があり、悩むこともありました。自分の好きなこと、やりたいことをやり続けるのは簡単そうに見えて実はとても難しいものです。なぜなら「自由」だからです。一人ひとり自分で自分のことを決める自由があるからこそ、「ほんものの私になる」という言葉が成り立つのだと思います。中学生のうちから自分の宝物を探してみてください。粘り強く何事にも挑戦し続ければ突然、自分の道が見つかると思います。案外くだらないことがきっかけになったりします。僕はこれからも楽しみ、頑張りながら「ほんものの私」を目指します。

6 成果と課題

（1）中学校におけるキャリア教育の目標「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」「興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成」「進路計画の立案と暫定的選択」「生き方や進路に関する現実的提案」を概ね達成できた。語り合う中で、試行錯誤や失敗の経験を共有することは安心感にもつながり、立ち上がる勇氣にもつながった。「失敗しても、ここで終わりじゃない」と話す生徒によく出会う。教員からの報告によると、ある生徒は、「3年生になると、『ほんものの私になる』という言葉は俄然、自分のこととして捉え、自分が頑張る指針となる」「パズルのピースがなくなっていくように自分が作られていく気がする」と話したということだ。

自己内対話を繰り返し、経験を絶えず再構築していく学びを獲得したと言える。入試や進路選択の進路決定に直面して、自分と向き合うことで、「困難や未知の状況にも対応できる考え方」「学びに向かう力」を、生徒自ら、実感として手に入れた。

実際に、自分のしたいこと、自分らしさを第一の基準として選択した生徒も多く、進路先は、バラエティに富んでいる。

(2) 学校全体での取組は、生徒の感想「違った意見を聞き、新しい視点を聞くことで、自分の考えが更に太ったと思った」のように、生徒に充実感や達成感をもたらした。生徒たちは、この取組を誇りに思い、それは教育活動に主体的に取り組む姿となって表れている。また「失敗の経験を生かした（1年73.5%⇒3年80.4%）」「自分と違う意見や考え、気持ちも大切にしたい（1年86.3%⇒3年91.8%）」等、多くの項目で学年が上がるにつれて、肯定率が上がった。

互いの意見を認め合う環境作りが、社会人としての土台作りにもつながる。

(3) 多様な対話を繰り返す中で、「単に知っているという知識」は、「生きて働く知識」、すなわち「人生を支える」糧としてそれぞれの生徒の中に定着し始めた。学びがつながり始めた。例えば、「意見文を書くときは、『最も』『たしかに』」というように、他者の意見を考慮した部分を設けよ、という学習を、討論会の発表の際に生かしてみた。それから、日常の生活でも友達同士の会話の時に、まず、人の話を聞いてみる姿勢へとつながった」と報告する生徒がいる。あるいは、「『発表の時、前の人の意見とつなげて、自分の意見を言いなさい』と先生からいつも言われるので、自分の中で意見を組み立てるときも、つながりを意識していったら、ばらばらだった自分の考えがつながり、考えに筋道ができた」と満足そうに報告する生徒もいた。一方、全国学力調査（文部科学省）の国語・数学における「問題B（主として『活用』に関する問題）」においても、国の平均より15ポイントほど上回り、生徒の思考力の定着が見られた。

(4) よりよく生きることを志向する言葉として、「ほんものの私になる」を提示した。「世界中に自分の材料がある。自分の人生を生きていく上での経験や知識、人との関わり合いなどが、私を作る材料になる。『ほんものの私になる』を三年間で見付けることが目的ではなく、考え続けることが目的であったのだ。つまり、中学校だけでなく、高校生や大学生、社会人になったときでも探し続ける目標なのだ」のように、今後も、自分の生き方の指針として求め続けるという意欲が表れている。これは、よりよく生きることについて、真剣に考えた成果である。自分自身を信頼し、未来を信じる力強さがある。自分で判断し、よりよい生き方を選択していこうとする土壌を培うことができたと考える。

それは、本論（5. 高等学校での成長―「卒業生の話を聴く会」―）でも示したように、卒業後も、自分の夢や目標に向かって、具体的に努力している卒業生の姿からも感じ取ることができた。どのように未来を創っていくのか、どのように社会と関わり貢献できるのか、それを実現させるためにはどういう力を伸ばし、身に付ける必要があるのか、つまり、人生をより良いものにしていくという目的に向かって、自ら考え、歩き出す根本を形成していくのが、キャリア教育

の神髄である。それは、小学校から、中学校、高等学校というように、連続していくことの大切さを再確認した。

（５）ポートフォリオによる積み重ねは、視覚的に自分の成長が分かり、現在の自分が、過去の自分を振り返ることで肯定的に自己理解をし、価値付けることを促した。記録があることで、卒業時に３年間の自分と対話をする中から、よりよい将来を主体的に設計しようとする気持ちが高まった。現在の自分を肯定することで、社会的な視点・未来への展望と視野が広がっていったことは、キャリア教育の視点からも有効であった。

以上を通して、「勤労観・職業観に関連する４つの能力『人間関係形成能力』『情報活用能力』『将来設計能力』『意思決定能力』（註５）」についても、向上したと考えている。

６ 終わりに

３年生の３月、一人ずつ面談を行った。最も感銘を受けたのは、全ての生徒が、「中学校３年間のうちに、辛い経験をしていて、それぞれの方法で乗り越えたこと、そして、その貴重な経験があったからこそ、現在がある」とさわやかに、輝く笑顔で語ったことである。私は、３年間の取組が、確実に生徒の思考過程に息づき、一人一人の生徒が、よりよい生き方を求めて、今後の人生を生き抜いてくれることを確信した。

<参考文献>

（註１）中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」平成23年１月31日＞

（註２）「キャリア教育って結局何なんだ？」国立教育政策研究所 平成21年11月

（註３）『中学校キャリア教育推進の手引』文部科学省 平成23年５月

（註４）『高等学校キャリア教育推進の手引』文部科学省 平成24年５月

（註５）「望ましい勤労観・職業観の育成Ⅱ＝キャリア教育の頂点に立った進路指導の充を目指して＝」東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課 平成17年３月

その他の参考資料

* 「生徒指導提要」 平成22年３月 文部科学省

* 「『キャリア教育』資料集」 平成21年度増補版 国立教育政策研究所

* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善 について（答申）」 平成20年１月

* 「『自尊感情』？それとも『自己有用感』？」国立教育政策研究所 平成27年３月

* 「子供たちの『見取り』と教育活動の『点検』～キャリア教育を一步進める評価～」
国立教育政策研究所 平成27年３月

* 「中学校学習指導要領解説（総則）（国語）（総合的な学習の時間）（特別活動）」
文部科学省 平成20年９月